令和５年　８月４日

貝塚市議会議長 南野　敬介 殿

公明党議員団視察報告書

公明党議員団
前園 隆博
谷口 美保子
堺谷　裕

視察　１日目
日時　令和５年７月２７日(木)午後１時半～3 時
場所 宮城県宮城郡七ヶ浜・七ヶ浜国際村

午後一時半：七ヶ浜国際村村長室にて始まる
一、七ヶ浜町議会議長 岡崎 正憲氏よりご挨拶を頂く

七ヶ浜町は、七つの浜から成り立っています。
周りが海に囲まれた町で仙台市内へのベットタウンとなっており非常に昼夜間の人口格差の大きな町である。
漁師町と新しい住民の方が入り混じった町である。
交通手段が整備されていない為、安全運転指導を徹底的に行い、自家用車の保有を勧めている為、高齢者の方の免許返納は少なく高齢の方も多く車を運転されている。
又、軽井沢や野尻湖と並ぶ「日本三大外国人避暑地」一つとして今でも外国の方が避暑に訪れている。高山という場でその関係からも今日視察して頂く七ヶ浜国際村も作られました。つい、先日３０周年を迎える事が出来ました。
藩政時代に沿岸、近海が中心だった漁場は大正期から徐々に拡大し昭和３０年代後半ころからは北洋底引き網漁も行われるようになりました。
現在は海藻類の養殖も盛んで、特に海苔は「皇室献上海苔」として高い評価を得ています。
東日本大震災の際には津波による大震災を受けましたが現在では復興団地に多くの方が移り住み町のキャッチフレーズである「うみ・ひと・まち 七ヶ浜」のようにあくまでも海を中心としたまちづくりを進めています。
とのご挨拶を頂きました。

二、七ヶ浜国際村 事務局長　五島 謙一氏　主任主査 佐藤　渉氏より説明頂く

■七ヶ浜国際村の経緯と役割

明治２２年以来、山の軽井沢、湖の野尻湖と並び、宣教師の方が住まれて海の高山として４２棟の別荘が存在し、その場所を９９９年間の地上権を設定し交流を続けてきた。

そんな中で平成２年にアメリカのマサチューセッツ州のプリマス町と姉妹都市を締結、平成５年に七ヶ浜国際村と姉妹都市プリマス町の１６２０年代の伝統的建造物を再現したプリマスハウスがオープンした。

平成６年からは町に国際交流員と外国語指導助手を配置し更に平成２８年からは国際交流の次なるステージとして、七ヶ浜町の時代を担う子どもたちを、世界を舞台に活躍出来る国際人に育てるための「七ヶ浜グローバル人材育成プログラム」スタートさせるこどもたちに財産を残したいとの想いの元、開館以来、七ヶ浜国際村は、町の国際化の推進や文化芸術の振興におおきな役割を果たし、マスメディアでも大きく取り上げられ周囲の地域から七ヶ浜の人たちへの見方が変わった。色々な人、音楽家、画家、創作家そして育成団体と共にハード・ソフト両面においてきめ細やかな対応を続けてきた。

３０億円の地方債を活用し建築、毎年１億５千万～２億円の運転資金が投入されている。

■七ヶ浜国際村施設の概要

七ヶ浜国際村　　ＲＣ造三階建て

（ホール棟一階）	１９１４、６５平方メートル
（ホール棟二階）	６６５、２５平方メートル
（ホール棟三階）	２９５．９２平方メートル
（セミナー棟一階）	１９０２．０２平方メートル
プリマスハウス　　木造二階建て	１８４．８３平方メートル

■　七ヶ浜国際村のコンセプトと事業展開

（地域の国際化の拠点として）

① プリマス町との姉妹都市交流

② グローバル人材育成プログラムの推進

③ 七ヶ浜国際村インターナショナルデイズの開催

④ 七ヶ浜国際交流協会との共催事業

（文化芸術の創造・発信きちとして）

① レジデント・アーティスト

② 七ヶ浜アート・ウォリアーズ

③ 七ヶ浜国際村パフォーマンスカンパニー公演

町民によるミュージカルグループ「NaNa5931」小学生から大人まで現在３０人で活動している。３歳から所属していた子どももいる。復興に向かって進む町民の勇気を体現しミュージカルにして伝え、支援していただいた全国の皆様に感謝の気持ちを伝え、風化させない活動が加わりました。全国各地で公演している。

■七ヶ浜国際村の利用状況について

（１）利用人数の推移

平成５年の開館以来、来館者数は３，７４４，４９２人を数えます。
平成２３年３月１１日から６月３０日までは避難所として利用されました。
それ以降は東日本大震災被災者へのアーティストの支援（公演）により利用者は増加傾向にありましたが新型コロナウイルス感染防止対策として休館や定員を半分にするなどした為、来場者数は減少しました。
（２）施設全体の稼働率、稼働日数、使用日数
年間２０本の主催事業の他、貸館として楽器の個人練習、教室などの少人数の利用から町内の幼稚園のおゆうぎ会、町内外の中学校の合唱コンクール、敬老会などの大人数のものまで、行政、民間を問わず、老若男女、幅広く利用されている。
開館以来、ほぼ毎日いずれかの施設の利用があり、令和４年度は初めて稼働率が 100%になるなど、全体として 100%に近い稼働率となっています。毎日どこかの部屋が使われているという状況です。

■施設見学
開館３０年ではありますが、しっかりと補修、綺麗に使用されている。
アンフィシアター（円形劇場）は野外にあり周囲が水に囲まれ、巻貝をかたどっているとの事。
建物全体が巻貝を表している。
ホールは舞台の奥の幕を開けると一面がガラス張りになっており海が広がる仕組みになっている。
プリマスハウスは１８世紀当時のアメリカ、プリマスの様子が再現されていて当時の暮らしぶりがよくわかるようになっている。

【感想】
町民の方々が大切に使われていることがよくわかる場所であった。
我が貝塚市にも貝の形をしたシェルシアターという野外舞台がありますと話すと大変に素晴らしいと言ってくださったが、残念ながら稼働率は本当に惨憺たるものである。
海辺を大切に生かしていかなければと感じました。この場所の眼下にある海水浴場はすでにブルーフラッグの認証を受けているとのこと、これから貝塚市で目指すものでありました。
又、姉妹都市をもっと広く皆様にわかってもらえる工夫も必要であると感じました。

視察　2 日目

日 時　7 月 28 日（金） 10 時～11 時 30 分

場所　宮城県石巻市穀町 14－1　　石巻市役所

面談者　石巻市議会　副議長　奥山　浩幸　氏

石巻市復興区画部　理事　大壁　勇彦　氏　　復興推進課　課長　山田　伸晃　氏

議会事務局　生出 祐也　氏

目的 震災復興の取り組みについて

東日本大震災について

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、マグニチュード 9.0 震度 6 強、国内観測史上最大の地震が発生し、8.6m の津波に襲われました。また、最大 120cm の地盤沈下がおきました。

死者 3,188 名、行方不明者 414 名。浸水面積 73k ㎡（被災地では最も広い面積）。

被災住家 56, 708 棟(76.6%)。

最大避難者数 50,758 人、最大避難所数 259 箇所（避難所は平成 23 年 10 月 11 日に全て閉鎖）

応急仮設住宅 整備数 7,153 戸、解体数 5,293 戸　（令和 2 年度で全て完了）

災害ガレキ 発生数量 629 万トン 処理必要推計量 428 万トン（平成 26 年 3 月完了）

(1) 復興の現状について

復旧・再生を乗り越える新たな産業創出や減災のまちづくりを推進しながら、快適で住みやすく、市民の夢や希望を実現する新しい石巻市の創造を目指し、3 つの基本理念を掲げた。

基本理念 1　災害に強いまちづくり

基本理念 2　産業・経済の再生

基本理念 3　絆と協働の共鳴社会づくり

住民への対応

まちづくりに関するアンケート　　平成 23 年 5 月 1 日～5 月 15 日

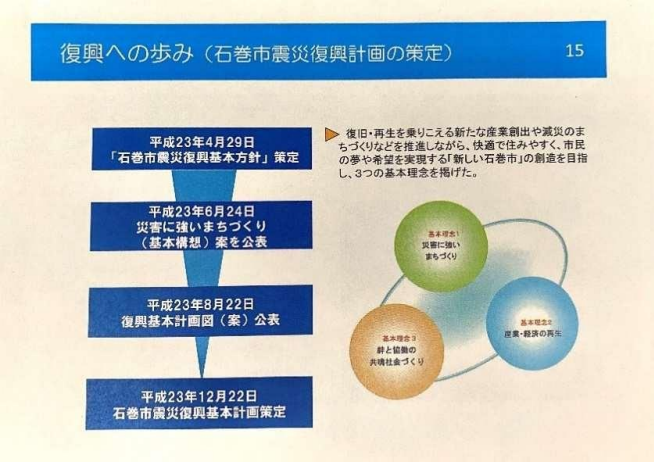
住民との意見交換会　　平成 23 年 7 月 14 日～7 月 24 日

津波から人とまちを守る思いを伝えた。

復興事業説明会　　平成 23 年 11 月 24 日～12 月 17 日

石巻市震災復興基本計画の策定

今後の住まい等に関するアンケート　　平成 24 年 2 月 8 日～3 月 31 日
　　復興事業の基礎資料として活用
移転対象者の個別相談会　　平成 24 年 5 月 28 日～6 月 30 日



(2) 課題、問題点について
市民が感じる復興
住宅再建や堤防、道路等の基盤整備は進んでいるが、総合支所、公民館等の施設整備、交流や憩いの場となる公園整備、学校、保育所等の施設整備が進んでいると感じている人は少ない。

(3) 今後の取り組みについて
市民が感じる将来の再生・発展のために重要なこと
安全で安心できる防災体制。市内で多くの方が働く場の創出、身近な医療施設などがあげられる。

【感想】2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から今年で 12 年です。ハード面での復興・普及は大分進んできた感じがします。今後ソフト面での復興が大切であると感じました。
本市でも南海トラフ地震などの災害などに備えてしっかり、防災・減災に取り組んでいきたいと思います。

日時 7 月28 日(金) 13 時～14 時
場所 震災遺構大川小学校

2011 年3 月11 日、津波が川からと陸から襲ってきました。
高さ 8.6m の津波が学校を飲み込み、児童 74 名、教職員 10 名が犠牲となりました。
大川地区全体では 418 名が津波の犠牲となりました。
石巻市はこの事象と教訓を伝え続けるため、学校を震災遺構として残しました。

【感想】
大川小の避難マニュアルの点検、指導がなされていませんでした。
また、体育館裏の山は傾斜が緩く、避難も可能でした。
残念ながら、多くの尊い命が失われました。今後、命を守るためにどうしたらいいのか考えるきっかけにしていきたいと思います。

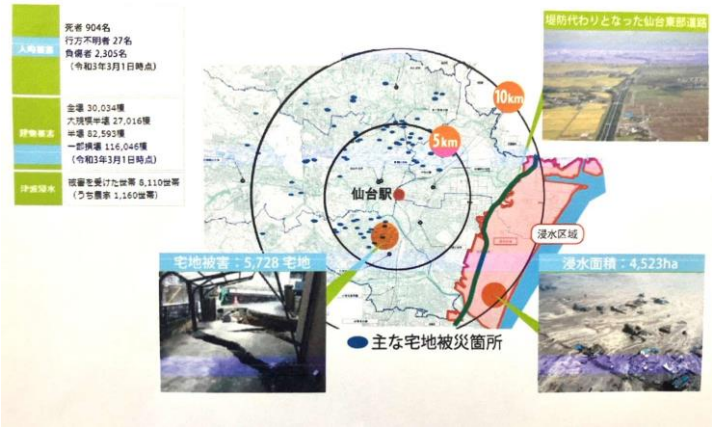
日 時 7 月28 日(金) 15 時30 分～16 時30 分
場所 宮城県仙台市若林区荒浜字新堀端 32-1 仙台市立荒浜小学校
面談者 仙台市まちづくり政策局 震災メモリアル事業担当課長 田中 智洋 氏
川村 氏

東日本大震災の被害と震災復興の取り組みについて

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、マグニチュード 9.0 三陸沖を震源とする大地震に襲われました
市内で最大震度 6 強を観測し、東部沿岸部を襲った津波による被害のほか北西丘綾部を中心に発生した大規模な地すべりなどの宅地被害が発生しました。
一方、市内中心部ではビルの倒壊や火災の延焼などの大規模な被害は免れましたが、市全体で約 14 万戸の家屋が半壊以上の被害を受けるなど、多くの被害が発生しました。
また、最大で市の人口 10%にあたる 10 万人以上が避難した避難所の運営、帰宅困難者の一時滞在場所の確保、高齢者や障害者への対応など都市ならではの課題が改めて明らかになりました。
東日本大震災から 8 か月後の 2011 年 11 月、仙台市は、市民とともに東日本大震災からの復旧・

復興に向けて取り組むべき施策を体系的に定め、計画的に推進していくことにより、一日も早い復興を達成することを目的とし、「仙台市震災復興計画」を策定しました。
復興計画では、「100 万人の復興プロジェクト」の一つとして震災メモリアルプロジェクトが掲げられ震災の記憶を後世に伝えること、震災の記録と復興を後世に継承するためのメモリアルを整備していくこと、また幅広い市民との協働により震災の記憶を留め、復興の姿を発信していく仕組みづくりを進めることとなりました。

・仙台市震災復興計画 概要版（2011（平成 23 年）年 11 月）
・仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書（2014（平成 26）年 12 月）
復旧・再生を乗り越える新たな産業創出や減災のまちづくりを推進しながら、快適で住みやすく、市民の夢や希望を実現する新しい石巻市の創造を目指し、3 つの基本理念を掲げた。



（1） 復興の現状について（仙台市荒浜小学校）
東日本大震災において、児童や教職員、住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた荒浜小学校。津波による犠牲を再び起こさないため、その校舎を震災遺構として公開し、津波の脅威や教訓を後世に伝えています。
校舎外周 1 階 2 階
校舎の被害状況や被害直後の様子を伝える写真などから、荒浜小学校を襲った津波の脅威を知ることができます。
4 階／屋上
荒浜小学校における、地震発生から避難、津波の襲来、救助されるまでの経過を写真や映像で振り返るとともに、災害への備えについて学ぶことができます。また、荒浜地区の歴史や文化、荒浜小学校の思い出なども紹介しています。
屋上では、荒浜地区全体を見渡しながら、被災前後の風景を比較することができます。
荒浜地区住宅「津波被害を受けた住宅の基礎などを保存している」
津波の高さの恐怖を忘れないために建立された観音像と慰霊碑

（2） 課題、問題点について

沿岸部の被害危険区域内において防災集団移転促進事業により本市が買い取った土地（集団移転跡地）活用が今後の課題である。

（3） 今後の取り組みについて

意欲ある市民や事業者に土地をお貸しし民間の自由な発想で主体的に使っていただくことを基本としながら多くの方々に親しまれる土地利用に向けた取り組みが必要である。

荒浜小学校校舎

被害状況（廊下）

被害状況（住宅の基礎）

【感想】

震災で直面した課題やそこから得た教訓とその対応を次世代へ継承し、将来の災害に備えるための一助として復旧、復興、防災に取り組みをしていただいていることがすごく伝わってきました。